空の色

木本ノエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空の色

【Ｎコード】
Ｎ８０８０Ｘ

【作者名】
木本ノエル

【あらすじ】
「空ってさ、心とおんなじって知ってた？」
ある日突然現れた一つ年下の男の子。
空に恋をする彼に恋をした。
優しすぎる恋人と魅力的な彼との間で揺れる気持ち。
彼女が出した答えとは――――――

誰にでもおこりうる日常を描いてみました。
恋する女性に読んで頂けたら嬉しいです。
勿論男性の方も大歓迎です。

あまり文章が得意では無いので読みづらかったらすみません。

エピローグ

「…信じらんない。」

ドアを開けて出た第一声。

後から知ったのだが昨晩は記録的な大雪が降ったらしく、辺り一面真っ白で勿論凍えるような寒さだった。

「最悪。」

眉間にシワをよせてため息をつく私の後ろで隆之がクスクス笑う。

「凛はホント寒いの苦手だね。」

「しょうがないじゃん。」

そう言って彼の腕にしがみついた。

隆之と付き合い始めてすぐ一緒に住みだし、もうすぐ半年が経つ。

お互い今年２５歳。

このまま続けば結婚するのかもしれない。

そんな事をいつも他人事のように考えている。

今日は久しぶりに二人の休みが合ったので、私が前から気になっていた映画を観に行く予定だった。

隆之はいつも私の都合に合わせてくれる。

ありがたいけど時々むなしくなる。

たまには強引にリード欲しいなんて思ったりするのが本音だったりもする。

でもそれを本人に伝えないのは結局は彼に嫌われたくないからなんだろう。

「先にご飯食べてく？」

当たり前のように組んだ腕を軽く引っ張って彼を見上げて返事を待った。

うーん、言いながら隆之がこっちを見ようとしたと同時に彼の携帯が鳴った。

隆之の目線が液晶を見て、それから私を見た。

「ゴメン、出ていい？」

いいよ、と言う前に通話ボタンを押している。
…だったら聞かないでよ。
隆之は十秒程話すとまた私を見た。
その顔を見ただけで言いたい事が分かってしまう。
「今日はキャンセルだね。」
私が苦笑いすると、隆之はゴメンと言って駅へと走って行った。

隆之の仕事は高校教師。
彼が担任するクラスに1人不登校の女子生徒がいる。
名前は確か“小森”とかいったと思う。
何故不登校なのかは詳しくは分からないが、どうやらイジメが原因みたい。
隆之以外の大人は信用出来ない、とやたらと隆之に電話をかけてきては長電話やたまに今日みたいに呼び出される事もある。
その度に優しい優しい椎名隆之先生は大事な生徒の元へ駆けつける

のだ。

仕方ない事とは言え、毎度毎度こうはやっぱりキツイ。

また置いてきぼりになってしまった私は仕方なく雇われ店長をしている雑貨屋に顔を出す事にした。

キレイな男の子

私の勤め先は5年前に出来た、地元では一番大きな（といってもそこそこ田舎なので都会の人から見ればたいした規模じゃないと思うけど）ショッピングセンターの中にある“ｆｅｌｉｏ（フェリオ）”というオリジナルの生活雑貨を扱う小さなテナントだ。

「店長じゃ無いですか。」

アルバイトの菜摘が私に気付いて駆け寄ってきた。

「もしかしてイケメン彼氏さんと一緒ですか？今日デートなんですよね？」

「キャンセルになっちゃった。てかイケメンじゃないし。」

苦笑いで答えると菜摘は気を使ったのかそれ以上は何も言わなかった。

来週本社で行われる月一の会議に提出する資料を皆と雑談しながらまとめていると、ふと向かいの服屋に見慣れない人影を見つけた。

「あんな人いたっけ？」

「最近入った新しい人らしいですよ。確か店長の1個下だったよう

な。」

同じくアルバイトの可那子がコソコソと言ってきた。

「なんで知ってんの。」

「かっこ良かったんで喫煙室で一緒になった時に聞いちゃいました。」

「アンタねぇ…。人妻が何やってんのよ。」

「だってぇ。観賞用ですよ、観賞用。ちなみに名前は片丘智君っていうんだって。」

可那子は楽しそうに皆に報告している。

…呆れた。

そう思いながらも片丘君を見てしまう。

まぁ確かにキレイな顔をしている。

それになんか気になるんだよなぁ。

何故か凄く惹かれてしまうオーラを持っているよう。

不思議な人だな。

ずっと見ていたくなる。

だけどこれ以上見てたら本人に気付かれてしまうかもしれない。

もしかしたらそれより先に可那子が気付く可能性の方が高い。

どっちにしろマズイ。

私は慌てて資料を片付けると、何事も無かったかのように店を出た。

いつもそう

とぼとぼと駅へ向かう。

腕時計をチラッと見るとまだ3時前だった。

今から映画を観に行こうか。

隆之と二人で観るはずだったあの映画を。

ダメだ。

多分泣いてしまう。

コメディなのになぁ。

きっと家に着いたらまだ隆之は帰って無くて。

夜遅くにドアが開いて。

ただいまよりも先に私を抱きしめて。

ゴメンって、絶対埋め合わせするからって言う。

私は隆之が必要以上に遅く帰って来た理由が気になるくせに一切聞

かず。

今度高級フランス料理奢ってよねって笑う。

そして“今度”もどうせ小森さんを優先するんだろう。

いつもいつもそう。

隆之は何の為に私と付き合ってるんだろう。

ダメダメダメ！！

頭を左右に振ってさっきの考えを忘れようとする。

隆之を信じよう。

少なくとも私の事は好きなはず。

何度そう言い聞かせてきたんだろう。

そして隆之はこんな私の気持ちなんて知らない。

こんなの。

「…片思いみたいだ。」

分かってない

いつの間にかアパートの前に着いていた。
私は結局何処にも寄らず帰って来たらしい。
鍵を挿し、回す。
と、違和感を感じた。
鍵が開いている。
そうっとドアを開ける。
「凛？お帰り。」
奥から隆之が顔を出した。
「帰ってたの？」
「うん。」
「だったら電話してよ。」
隆之がはっとした顔をした。
私が置いてきぼりにされて、ずっと隆之を待っていたとか考えなかったんだろうか。

だけど今はもうそんな事はどうだっても良かった。

私は隆之に駆け寄り抱き付いていた。

「ゴメンな。今からでも出掛けようか。」

「いい。」

「え…」

「出掛けなくってもいい。」

私は隆之の背中をキツく抱きしめた。

「…今日はもうどこにも行かないで。」

隆之は何も言わず私の頭を撫でた。

違う。

そうして欲しいんじゃない。

どうして抱きしめ返してくれないの。

「…抱きしめてよ。」

そう言うと隆之は慌てて私を抱きしめた。

…ゴメン、と言いながら。

隆之は優柔不断

その夜、隆之は久しぶりに私を抱いた。
まるで子供をあやすように優しかった。
それはただ私の機嫌を取るのに必死だったようにも思えた。
彼も私に嫌われるのが怖いんだ。
結局は私達はよく似てるのかもしれない。

深夜1時頃をまわった頃、隆之が急にお腹が空いた、と言い出した。
晩御飯を食べて無いんだから仕方ない。
私はさほどでも無かったが、近所のコンビニに行くのに付いて行った。
コンビニに入ってからずっと隆之はお弁当の前で悩んでいる。
こんな時間なんだからほとんど残って無いのに何を悩む事があるんだろう。
「お弁当、欲しいの無いんだったらおでんにすれば？」

思わず呆れ顔で言ってしまった。

隆之はその言葉でようやくお菓子とペットボトルのジュースを選んでレジに向かい、ついでに大量のおでんを頼んだ。

隆之がお金を払っている間、私は何故か昼間見た男の子の事を思い出していた。

片丘君…だったっけ。

本当に印象的だった。

なんでこんなに気になるんだろうか。

あれ？

なんか…。

「お待たせ。」

隆之が私に笑いかけた。

私は差し出された手のひらを握り返して、さっき感じた原因不明の胸の高鳴りには気付かなかったふりをした。

合同朝礼

翌朝。

目が覚めると隆之はもう仕事に出ていた。

そういや今日は職員会議の日だっけ。

寝ぼけ頭でなんとかベッドからはい出た。

私も今日は週一の合同朝礼に出なきゃいけないからいつもより早く家を出る。

急いでシャワーを浴びて、化粧しながら隆之が作っておいてくれた朝ごはんを流し込んだ。

店に着くとそろそろ朝礼が始まる雰囲気だった。

良かった、ギリギリ間に合ったみたい。

隣は向かいの服屋の店長だ。

私と一緒で1人…かと思ったら今日はもう1人誰かいる。

誰だろうと思っていたら朝礼が始まってしまった。

たった１０分程の短い朝礼なのにいつも長く感じてしまう。

やっと終わったと思ってため息をついた。

「今日珍しくギリギリだったじゃん。」

話しかけてきたのは向かいの服屋の店長。

向かい同士というのと同い年というのですっかり意気投合してプライベートでもたまに遊ぶくらい仲がいい。

橋本実和（はしもとみわ）だから何故かはっしーと呼んでいる。

「寝坊しちゃった。」

「ドンマイ。あ、紹介するわ。」

はっしーは自分の隣に立っている人をチラッと見た。

その瞬間私の体を電流が駆け巡った。

だって隣にいたのは…

「こないだから来てくれてる片丘智君。片丘君、彼女は向かいのＦｅｌｉｏさんの店長の高屋凛さんよ。凄くお世話になってるの。」

片丘君ははっしーの言葉を聞いて、私に

「片丘です。よろしくお願いいたします。」

と、とても丁寧に頭を下げた後穏やかに微笑んだ。

突然の誘い

「そうだ、今日片丘君の歓迎会するから凛ちゃんも来れば？」

思わず片丘君の笑顔に見入ってしまっていたから急にはっしーに声をかけられてドキッとた。

「ダメだって。私関係無いのに…。」

「別にいいじゃん。他のコも誘ってさ。人数多い方が楽しいって。」

「でも…。」

チラッと片丘君を見たら目が合った。

「是非来てください。…凛さん。」

名前、呼ばれてしまった。

気がつけば頷いていた。

その日は丸一日歓迎会の事で頭がいっぱいで正直ずっと上の空だった。

ふわふわしたまま仕事が終わったのは夜の８時。

歓迎会は９時に駅前のおしゃれな居酒屋に予約を入れているとはっしーからメールが来ていた。

私１人で参加するのはなんだか気まずいので他のスタッフも誘ってみた。

Ｆｅｌｉｏからの参加者は綾瀬君と木田君というアルバイトの男の子二人と私の合計３人。

ちなみに可那子は夜遅いからと旦那さんにＯＫを貰えず、菜摘は明日早番だからキツイと二人とも不参加。

可那子はかなり残念がっていて少し面白かった。

時間まで適当に時間を潰してから、何故か少し緊張しながら指定された居酒屋に向かうとドアの前に人影を見つけた。

「片丘君？」

「凛さん…！！」

名前を呼ばれただけなのにドキドキしてしまう。

「なんで中入んないの？」

「入って1人だったらヤなんで誰か来るの待ってました。来たのが凛さんで良かった。」

なんで？って聞きそうになったけど慌ててやめた。

何意識してんの、私。

片丘君に連れられてお店の中に入るとわりと賑やかだった。

だけど案内された予約席には片丘君の予想通りまだ誰も来ていない。

必然的に二人きりになってしまった。

突然の電話

「皆来るまで何か飲んでます？」

片丘君が私にメニューを向けてくれた。

「じゃあ烏龍茶…。」

「飲めないんですか？」

「そういうわけじゃないんだけど最初はね。」

「なるほどね。じゃあ俺も烏龍茶にします。凛さんとお揃い。」

片丘君がニコッと笑う。

それだけなのにドキドキする。

きっとアレだ、個室だから。

訳の分からない理由でそう自分に言い訳する。

その時携帯が鳴った。

…隆之。

「出ないんですか？」

片丘君に促され仕方なく個室を出た。

「…もしもし。」

「今日まだ仕事？」

「今日飲み会に誘われちゃって…。今連絡しようと思ってたんだ。」

連絡するの忘れてたのに嘘ついちゃった。

「そっか。あんま遅くならないように気を付けて帰って来てね。」

隆之、優しい。

罪悪感に襲われながら片丘君のところに戻った。

片丘君は携帯をいじりながら待っていた。

彼女かな。

自分は同棲してる彼氏から電話があったくせに何故か落ち込んでしまいそうだった。

「ごめんね。」

声をかけるとパッと顔を上げて笑顔を見せてくれた。

片丘君の笑顔ってなんでこんなに魅力的なんたろう。

また見とれてしまった。

「もしかして彼氏さんですか？」

言葉がグサッと胸に刺さる。

最低だな、私。

隆之がいるのにこんな気持ちになるなんて。

「うん。」

私は抱いちゃいけないドキドキを振り切るようにはっきり答えた。

意味深

「彼氏さんいますよね。凛さん可愛いから。」

片丘君は私の顔を見ず、呟きながら烏龍茶を飲んだ。

「やだ、やめてよ。何言ってんの？可愛くなんか…。」

「可愛いよ。凛さんこそ何言ってんの？」

今度は私の目を真っ直ぐ見てきた。

もうやだ、何なの？

なんでそんなこと…。

ドキドキ止まれバカ。

「片丘君こそ彼女いるんじゃないの？さっき携帯いじってたの彼女でしょ？」

私は話をそらした。

だけど片丘君の目なんか見れない。

吸い込まれそうで。

そしたらきっと抜け出せない。

「いないよ。」

片丘君の声はひどく冷たく感じた。

「さっきのは俺の先生からのメール返してただけ。」

「先生？」

「俺、写真家の卵やってて。ずっと憧れてたプロの写真家の先生に去年やっと弟子にして貰ったんだ。そんで今度個展やるから手伝ってくれって言われてんだけど、もしかしたら俺の写真もいくつか展示して貰えるかもしれない。」

片丘君はいつの間にか目をキラキラさせている。

そうか。

片丘君に惹かれたのはきっと夢に向かって一生懸命頑張ってて、そ

れが眩しいオーラになっていたからなのかも。
だからこんなに魅力的なんだ。
「片丘君カッコいいね。」
「全然。まだまだ写真で食ってけないからバイトしてるくらいだし。」
「でも夢があるって凄いよ。私、片丘君の先生の個展見に行きたいな。」
「本当に？だったら先生に頼んでチケット手配する。」
「いいの？」
「勿論。…あ、でも彼氏さんとは一緒に来ないでね。」
「なんで？」
「絶対ヘコむ、から。」
「え…？」
聞き返そうと思った時、はっしーがやって来た。

その後だんだんメンバーが増えてきて歓迎会が始まった。

結局片丘君の意味深発言の理由は分からず仕舞いだった。

お泊まり

歓迎会はかなり盛り上がった。

そのせいか私はさっきの片丘君の言葉なんてすっかり忘れてしまっていた。

時々目が合う度に誰も気付かないくらいさりげなく片丘君が優しく微笑むから動揺を隠すのが大変だったけど。

だけど時間は知らない間に過ぎてしまうもので。

気がつけば深夜3時を回っており、当然のごとく終電は終わってるのだ。

そこで初めて全員電車だった事を思い出して一気に酔いが覚めていく。

そんな重たい沈黙を最初に破ったのは片丘君だった。

「あの…俺ん家ここの隣の駅の近くなんで、ちょっと歩きますけど良かったら泊まります？」

「…マジ？」

片丘君が住んでいるマンションは割と新しめで、部屋は一人で住むにはずいぶん広い２ＬＤＫだった。

だけど一番小さな部屋は撮った写真を現像するために使ってるから正味リビングと寝室だけみたいなもんです、と笑いながら私だけにこっそり教えくれたのは秘密。

「雑魚寝で申し訳ないですけど。」

と言いながらも毛布やらクッションをたくさん出してくれた。

一人暮らしでなんでこんなに毛布があるのか不思議に思っていたら、学生時代の友達がよく泊まるからとたくさん置いてあるらしい。

私達は片丘君の優しさに甘え、私ははっしーと並んでホットカーペットの上に寝っ転がった。

朝方５時頃、トイレで目が覚めてしまった。

はっしーを起こさないようにそっと起き上がり静かにトイレに向かう。

用も終わりドアを開けると片丘君が立っていた。

「ゴメン、起こしちゃった？」

「いや…。」

また少し寝ようと思い、戻ろうとした私の腕を片丘君が引っ張った。

そしてそのままおでこにキスをされた。

片丘君は、突然過ぎて言葉が出てこない私をぎゅっと抱きしめた。

「俺…凛さんに一目惚れしたみたいです。」

そう呟くと片丘君は寂しそうに微笑んで木田君の隣りに戻った。

私はフラフラしながらもはっしーの隣に戻り毛布を被った。

だけどドキドキし過ぎてもう寝られなかった。

空の色

翌朝。

皆二日酔いで頭を押さえたまま唸っていた。

「皆飲み過ぎですよ。」

そう言って笑いながらも片丘君は全員分の朝食を用意してくれた。

片丘君はこんな可愛い顔をして意外とお酒が強いらしく一人だけケロッとしていた。

あぁ、温かいお味噌汁が身体中に染み渡る。

綾瀬君と木田君はお腹が空いていたのかかなりがっついて食べていて、それを片丘君がニコニコと見ている。

片丘君、本当に優しい顔するんだなぁ。

ふと朝方の事を思い出す。

片丘君の腕。

細く見えるけど、筋肉質で強かった。
それに胸も。
小柄で細身な私なんかすっぽり隠れちゃうくらい広くて、温かかった。
…あと、唇も。
少し震えてた。

そんなことを思い出してぼーっとしていたら、いつの間にか皆帰る支度をしていた。
私も慌ててカバンを持ち上げた。
するとはっしーが、
「凛、今日休みじゃなかった？」
と言い出した。
「そうだけど…。」
「じゃ、もう少しゆっくりしていかないですか？」

声がした方を向くと、片丘君が私を見つめている。

「俺が撮った写真、見ません？」

「み、見たいけど…でもいいの？」

「勿論。俺、先生以外にほとんど見せた事無いんで是非見て欲しいです。」

私は慌ててはっしーを見た。

「私ら仕事だから帰るね。じゃ、また明日。」

はっしーは、やたら明るい声でそう言うと私と片丘君に手を振って本当に帰ってしまった。

片丘君は呆然とドアを見つめる私を辛そうな顔で見た。

「すみません、なんか無理矢理引き留めちゃったみたいで…。迷惑、ですよね？」

「そんな…。でも本当に残っていいの？こっちこそ迷惑かけてない？」

「全然！！むしろ有難いです。本当に先生以外に見せる機会が無いんで、先生以外の人の意見も聞きたいって思ってたんで。」

片丘君は凄く嬉しそうに言いながら、現像専用部屋のドアを開けた。
私は戸惑いながらも本音は嬉しいと思っていた。
本当はもう少しだけ片丘君といたいって思ってたから。
でもそんなこと、写真を見せる事を純粋に喜んでいる片丘君にバレたら軽蔑されそうで、必死に隠した。

部屋の中は薄暗くて不思議な空間だった。
だけどここが片丘君の夢が詰まってる場所なんだ、と思ったらワクワクしちゃう。
片丘君は薬品の事とか現像する方法を楽しそうに説明してくれた。
だけど難しい用語がたくさんで、正直何一つ分からなかった。
目が点になった私に気付いた片丘君は
「すみません。こんな話しても面白く無いですよね。」
と苦笑いした。
「うーん…。正直よく分かんないけど、面白く無いわけじゃ無いよ。

片丘君、楽しそうだし。」

そう言うと片丘君は顔を真っ赤にした。

ヤバい、可愛い！！

「あのっ…えっと、写真ですよね。こっち…。」

緊張しながら片丘君はドアを開けた。

耳まで真っ赤っかの片丘君が堪らなく愛しく感じた。

片丘君は寝室から大きなファイルを5つも抱えてきた。

中には大量の写真。

だけどきちんと年と月ごとに整理されていて、それだけで片丘君の真面目な性格が分かるようだ。

古い物から順番に見ていく。

ジャンルは風景から動物、人物に至ってはヌードまであった。

だけどどれも優しくて穏やかな写真ばっかりだ。

「自分的にはこれが一番気に入ってるんです。」

片丘君は一枚の写真を私に見せた。
それは眩しいくらい真っ青な空の写真だった。
私は一瞬で心を奪われた。
「キレイ…。」
涙が出そうな程。

「凛さん。」
「？」
「空ってさ、心とおんなじって知ってた？」
「え…？」
「気持ちが優しい時は優しく包むような色になるし、気持ちがすさんでる時はどれだけ晴れていてもやっぱりどこか暗く感じる。空の色って自分の気持ちを映す鏡だと思うんだ。だから悩んでたり自分の気持ちが分からない時はよく空を見上げてる。…ま、俺だけだと思うけどね。多分空に恋してんのかも。」
照れくさそうにはにかむ片丘君。

私は思わず彼の腕を掴んでいた。

「私は？」

「え…？」

「私の事考えてる時は？空はどんな色してる？」

片丘君は彼の腕を掴む私の手を握って私を見つめた。

「…今まで見た中で、一番鮮やかでキレイだ。」

片丘君は私を抱き寄せ、そして互いに引き寄せられるように、本当に当たり前のように唇を重ねた。

ズルい女

唇が離れて片丘君は目を伏せた。

その理由が私にも分かった。

それは私に彼氏がいるから。

なのに私は図々しくも片丘君が目を伏せた事にショックを受けていた。

「この事、誰にも言わないでくださいね。」

どうしてそんな悲しい事言うの？

片丘君がそう思うのは当たり前の事なのに。

私は、ズルい。

隆之を失う勇気は無い。

それなのにさっきから片丘君に握られた左手を離したくないと思っている。

片丘君が、欲しい。

だけど隆之も必要。

そんな私の醜い心を感じ取ったのか、片丘君は私を抱きしめた。

「二番目でいいです。俺が必要な時に必要としてくれたらそれでもう充分です。」

「そんな…」

「彼氏がいるってだけで諦めたくない。凛さんが欲しい。」

その瞬間背中に何かが当たった。

…床だ。

押し倒されてる。

「凛さん。」

「はい…。」

「俺の事、好きでしょ？」

「…うん。」

「じゃあ時々は俺のモノになってよ。」

「それって二股じゃん。」

「それでどっちが本当に必要か選んで。それまで待つから。」

「そんな事出来ないよ。」

「でも俺の事失いたくないよね？」

「それは…。」

「じゃあそれしか選択肢無いんじゃない？」

片丘君は意地悪く笑って強引にキスをしてきた。

長い長いキスの後、私は完全に火照っていた。

片丘君の言う通り、選択肢は一つしか無い気がしてきた。

それから私の二人めの”恋人”に心も身体も溶ろかされてしまったのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8080x/

空の色

2011年12月30日01時45分発行